

ごん吉くんレポート

～南吉よもやま話～

第42回

同級生

稲生稔彦の手記

今回は、旧制半田中学校で新美南吉の同級生だった稲生稔彦さんが書き遺した手記についてご紹介いたします。

稲生稔彦さんは亀崎出身で、早稲田大学に進み、卒業後は京都に暮らして昭和60年に亡くなりました。手記は稔彦さんが病氣療養していた晩年に書いたもので、近年、自宅で発見されました。下書きの部分もあって未完成ですが、南吉に関わる事柄が多く含まれ、共に東京で学生時代をおくった二人の親しい交遊ぶりがかがえます。(以下敬称略)

稲彦は、中学生の頃、同盟書林でフロイトの全集を手にしたこと心理学に興味を持ち、その傾倒ぶりは家族を心配させるほどでした。もうひとつ、彼を夢中にさせたのが音楽です。将来は作曲家になるのが夢で、大学時代は「東京中の名曲喫茶は判る丈探して」聴いて回り、その中には南吉と訪れた喫茶店もありました。

手記には、こうした稔彦が

愛した学問、芸術に関することがたくさん書かれていて、彼が南吉に与えた影響を想像することが出来ます。

近年の研究で、南吉は新心理主義文学から影響を受けていることが指摘されています。新心理主義は人間の深層心理を描こうとする昭和初期の文芸思潮で、成立の背景にはフロイトの精神分析学があります。その知識を豊富に持った稔彦は、南吉にとって語り甲斐がある相手だったでしょう。また、自身も音楽好きだった南吉は、ジャンルの定義や声域の区分など音楽に関する様々な知識を稔彦から得ています。

一方、稔彦の方も南吉に勧められて小説の執筆に挑戦しています。手記には、書いた作品を「読めと云うので声を出して読むと、うんうんと云いながら新美はきいていて、何かと批評してくれる。それから自分は最近こんな作品をつくったんだ、きいてくれと彼も声を出してよみ始める。」「何度読み合いをした事か。」

それから必ず僕は喫茶店へゆこうと行ってそこで又論争をひとときやり、それからあれこれの話をしながら高田の馬場あたり迄見送ってくるのである。」と、互いの作品を批評し合い、文学談義にふける様子が書かれています。

その他にも手記には、南吉の好物がリングゴだったことから東京での女性関係まで、あまり知られていない事柄が記されています。また、稔彦は南吉の詩5編に作曲をしていて、その自筆楽譜も遺されています。

手記や楽譜は、3月に発行した『新美南吉記念館研究紀要』第25号に収録されています。半田市立図書館で借りられるほか、南吉記念館で販売(800円)もしていますので、興味のある方はお読みください。



ピアノに向かう早稲田時代の稲生稔彦

アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだことがきっかけで行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 市報で取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666
東洋町2-1 企画課
Eメール
kouhou@city.handa.lg.jp



編集後記

み

みなさんお気づきかと思いますが、今号は表紙を含む数ページをフルカラーとしました。カラーページは、市民のみなさんに少しでも手に取りやすく親しまれる市報として、いとの想いから今年度より数回導入するものです。費用をおさえるために、カラーページの号の中のページの色は、今までの色とは異なり青色となっております。

今後も、みなさんに伝わる市報とするために努力していきます。

(浅野)